

# 学生の社会的意識に対する地域貢献活動の影響

## — 大手前短期大学 FD 委員会研究報告 —

和田珠子, 藤本幹也, 野坂純子, 山田洋子  
(大手前短期大学 FD 委員会)

### 要 旨

大手前短期大学 FD 委員会では、本学学生の社会人基礎力の育成を目指し、2011年度から試験的に種々の地域貢献活動に学生を参加させてきた。その中で、具体的な活動内容の説明を受けた上で自発的に参加の意思表示をした学生に対し、活動の前後に質問紙調査を行ない、地域貢献活動が学生の社会的活動や職業に対する意識に及ぼす影響について検討した。

調査の結果、地域貢献活動に参加した学生の多くは、初めて体験すること、自信のないことへの不安を感じつつも活動に向かい、その中で社会人とコミュニケーションをし、成果を上げるという経験をしていることがわかった。さらに、自分の能力や短期大学での学習成果が社会で役立つことを実感し、達成感や自信を得た学生も多かった。

これらのことから、地域貢献活動を通して、多くの学生は社会における自分の適性を認識し、自己のキャリア形成への意欲を向上させていることが明らかになった。

**キーワード**：社会的意識、社会貢献、ボランティア、教育効果、社会人基礎力

### 1. はじめに

本学では、近年学生の多様化が進む中で、教育の質の向上を目指して様々な取り組みを行っている。そのうち、大手前短期大学 FD 委員会（以下、当委員会）では、学生の社会人基礎力の育成に重点を置いたプロジェクト・ベースド・ラーニング (PBL) 型課外学習の推進を試みている。中でも、特に地域の教育力を重視し、地域と連携して学生の能力を引き出すことのできるプロジェクトを模索してきた。今の本学学生に

にとって必要な教育とは、正課内での学びだけではないと考えるからである。

現代の学生の特徴として「自己中心的」<sup>1,2)</sup>「主体性がない」<sup>3,4)</sup>などと言われるが、その根底にあるのは心理的に幼いということではないだろうか。本学の学生を見ている、そのように感じる機会は少なくない。個人的な観察だが、失敗や挫折の経験が少なく、他者との関わりも少ない。また、それらの可能性のあることを避け、自分のよく知る小さな社会から外へ出ようとしない傾向も感じられる。当委員会では、このような学生の心理的成長を促し、社会人基礎力を伸ばすには、まず学生が地域社会と関わる機会を増やすことではないかと考え、2011年度より継続して近隣地域の公的施設や団体、企業と協定を結び、種々の地域貢献活動に学生を参加させている。

具体的には、①伊丹市立障害者福祉センター（通称「アイ愛センター」）でのサポート活動、②伊丹市立こぼと保育所でのサポート活動、③JR 駅（尼崎駅または猪名寺駅）構内展示制作活動、④猪名川・藻川の清流復元フォーラム－水辺まつり実行委員会における企画運営への参加、の4つである。活動の選定基準としては、学生が地域の社会人となるべく多く接触し、コミュニケーションをとる必要性が高い活動内容であることと、学生の活動が単なる労働奉仕ではなく社会貢献となることを必須条件とし、公益性を重視した。

本稿では、これらの地域貢献活動の実践により、学生の社会的活動や職業に対する意識にどのような変化が見られたかを検討する。

## 2. 調査概要

本学では、2011年度より掲示物や在学生および新入生オリエンテーション等の機会を利用して、地域貢献活動について全学生に告知し参加を呼びかけている。興味のある学生は説明会に参加し、詳細な説明を聞いた上で参加の意思表示をした者のみが登録するシステムである。

2011年度から2013年度の3年間、地域貢献活動への参加登録をした学生を対象に、質問紙調査を行った。年度毎に、活動に参加する前の説明会で1回目の調査（以下「活動前の調査」）を、活動に参加した後の報告会で2回目の調査（以下「活動後の調査」）を行った。質問項目は、過去および現在の社会的活動歴と、社会活動や職業に対する意識に関するものとし、活動前の調査では活動に当たっての意識を、活動後の調査では活動に対する振り返りを尋ねる項目を加えた。回答者の属性に関する質問は、年齢、性別、同居家族の有無、の3項目とした。

本研究では3年間の調査結果を合わせて集計した。活動前の調査の回答者数は74、活動後の調査の回答者数は60で、一方しか回答していない学生も含めた全回答者数は

88であった。男女比は男性7%、女性93%、同居家族は有りが80%、無しが20%であった。

### 3. 結果と考察

#### 3-1 学生の社会的活動歴と現状

地域貢献活動に参加しようという意欲のある学生が、過去および現在にわたりのような社会的活動を行っているかを知ることは、今後の地域貢献活動の方針を定めるために重要である。また、地域貢献活動は正課外の時間に行うため、学生が余暇に何をしているかを把握することも必要である。そこで、まず、学生の余暇の使い方を複数回答で調べた結果を図1に示す。

最も多かったのが「アルバイト」で、「友人とのつきあい」「趣味」「インターネット、携帯」と続いた。活動前に比べて活動後に減少したのは「家族との団欒」「友人とのつきあい」「テレビ・新聞・雑誌」の3項目で、それ以外は増加した。特に「趣味」と「スポーツ」が増加していた。学生時代は、家族や友人といったそれまで過ごしてきた小さな社会から外へと出て行く時間が飛躍的に多くなる時期であるが、余暇の使い方にもその傾向が見られるようだ。

なお、「ボランティア活動」は非常に少なく、余暇を自発的にボランティア活動に当てている学生はほとんどいないことがわかった。

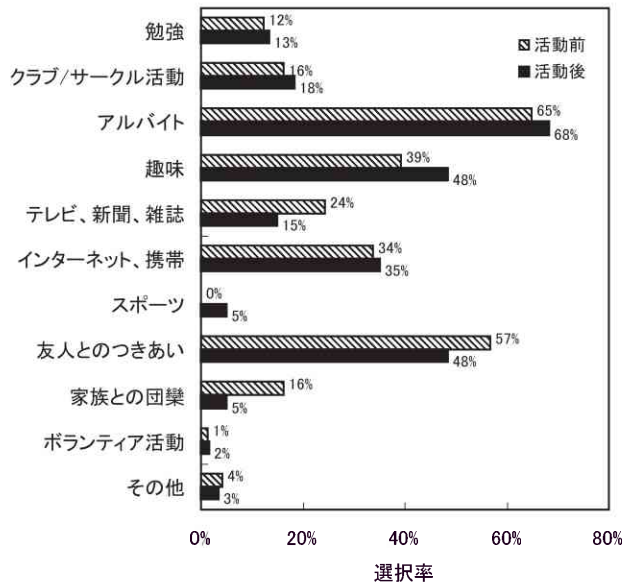


図1 余暇の使い方

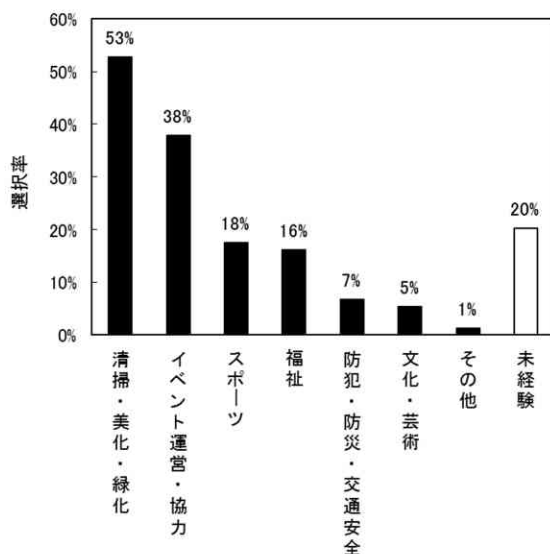


図2 過去の社会活動歴

次に、過去のボランティア等の社会的活動経験の有無を尋ねたところ、経験者が80%、未経験者は20%であった。

図2に示すとおり、経験者の活動内容としては、清掃・美化・緑化活動が最も多く53%、次いで地域の祭り等のイベント運営・協力が38%、スポーツ活動18%、福祉活動16%、防犯・防災・交通安全活動が7%、文化・芸術活動が5%であった。社会的活動の経験者の割合が高いのは、小・中・高等学校の教育の中でボランティア活動が取り入れられている場合が多いためと推察される。荒川らも、大学入学前のボランティア経験者は78%であり、そのうちの32%が小・中・高等学校の授業の一環としてボランティア活動に参加したことを報告している<sup>5)</sup>。

ただし、今回の結果は地域貢献活動に参加の意思表示をした学生のみからの回答から得たものであるため、本学の学生全体が同様の社会的活動経験を持つとは限らない。この点については、今後機会があれば学生全体にボランティア経験の有無を聞き、結果を比較検討したい。

### 3-2 社会的活動に対する意識とその変化

ここでは、本学で行った地域貢献活動に対して、学生がどのような意識を持って参加し、また活動後にどのような変化が見られたかを検討する。

#### (1) 参加の実態と動機

まず、活動内容ごとに学生の参加状況をまとめた(表1)。

欠席理由として多かったのは「体調不良」「急な用事」等であった。急用の中には、

表1 地域貢献活動の参加率<sup>注1)</sup>による分布<sup>注2)</sup> (%)

内容	参加率				
	全回参加	8割以上	5～7割	半分以下	途中辞退
障害者施設サポート	25	0	0	38	38
保育所サポート	50	39	4	7	0
JR 駅構内展示制作	0	35	40	15	10
水辺まつり	24	19	33	14	10

注1) 表中の「参加率」とは、学生自身が事前に参加すると申し出た日程のうち、実際に参加した日数の割合を示す。従って、同じ参加率の学生であっても、実際に参加した回数は異なる場合がある。

注2) 例えば障害者施設サポート活動に参加した学生のうち、全回参加した者が25%、半分以下の参加だった者および途中で辞退した者が各38%を占めたことを意味する。

アルバイトが急に入ったという理由も複数見られた。様々な経済環境にある学生にとって、事前に地域貢献活動の予定を入れていても、アルバイトが優先される場合もあることがわかった。計画の段階でも予想はしていたが、この点については十分に活動先とも話し合い、対策を準備することが重要である。

地域貢献活動開始前に「参加の動機」を、活動後に「参加して感じたこと」を複数回答で尋ねたところ、表2ようになった。

参加の動機の中で最も選択率が高かったのは、「新しいことに挑戦したい」であった。活動前の調査時期が、新学年が始まって間もない時期であったことが一因と考えられる。特に一年次生の場合、新しい環境で何か新しいことに挑戦したいという若者らしい期待が強いのではないかと推察される。次に選択率が高かったのは「楽しそ

表2 地域貢献活動への参加動機および活動後の感想

参加の動機 (活動前)	選択率 (%)	活動に対する感想 (活動後)	選択率 (%)
人の役に立ちたい	31	人の役に立てた	28
好き (得意) なことだから	16	好き (得意) なことが活用できた	10
新しいことに挑戦したい	53	新しいことに挑戦できた	37
新しい仲間や知り合いができる	18	新しい仲間や知り合いができた	35
楽しそう	47	楽しかった	60
就職活動に有利になりそう	31	就職活動で話せる (書ける) 内容ができた	18
		社会や仕事 (職業) について知る機会になった	17
単位がもらえる	24	自信がついた	10
時間がある	19	自分が成長した (変わった)	18
友達や先生に誘われたから	19	負担が大きかった	10

注) 太字の項目は、活動の前後の調査で対応しているもの。

う」で、学生にとっては楽しいと思えることがモチベーションと関係が深いことが伺える。また、「人の役に立ちたい」と「就職活動に有利になりそう」がいずれも31%で、3番目に選択率が高かった。ボランティア活動は、本来「他者のため」に行われるものであるが、近年では、ボランティア個人の生きがいや自己実現、新しい経験や知識の習得など、「自分のため」の活動という側面もあることが論じられている<sup>6)</sup>。本研究においても、「人の役に立ちたい」という他者志向的な動機もちろん存在するが、上述した「新しいことに挑戦したい」「楽しそう」「就職活動に有利になりそう」のほか、「単位がもらえる」「新しい仲間や知り合いができる」といった自己志向的な動機が多く混在することが明らかになった。

一方、活動後の感想は、選択率が高かった順に「楽しかった」「新しいことに挑戦できた」「新しい仲間や知り合いができた」「人の役に立てた」となり、参加の動機とは順位が異なる結果となった。活動前の参加の動機と、活動後の感想の間で対応する項目(表2の太字の項目)の選択率を比較すると、「新しいことへの挑戦」や「好き(得意)なことの活用」は活動前より後の方が減少したのに対し、活動後に大きく増加したのが「楽しかった」「新しい仲間や知り合いができた」であった。

## (2) 不安とその解消

活動前の調査では、地域貢献活動に対する不安は「ほとんどない」が5%、「あまりない」が47%に対し、「少しある」が39%、「かなりある」が7%と、不安を感じている学生が半数近くいた。活動後の調査でも、活動前に不安なことがあったかを振り返って尋ねたが、「ほとんどなかった」が12%、「あまりなかった」が33%、「少しあった」が42%、「かなりあった」が13%となった。調査対象者のほとんどが、本学での地域貢献活動に参加するのは初めてだったため、不安を感じた学生も多かったと考えられる。活動前の不安の内容は、「自分にできるのか」が最も多く、不安を感じた学生の76%、「人間関係」が50%、「友達と一緒にできないと不安」が21%、「その他」が3%であった。しかし、活動後の調査で不安がどうなったかを尋ねたところ、「不安がなくなつた・減つた」が82%と、大半の学生が不安を解消できていることが明らかになった(図3)。

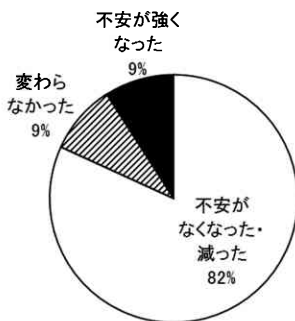


図3 不安の変化

不安の内容から見ても、実際に活動を開始すれば自然に解消する機会が多いのではないかと推測される。特に、社会経験の乏しい学生にとっては、今回のような経験、すなわち、地域貢献活動という一つのプロジェクトに直面して自信の無さや人間関係構築に対する不安を感じつつも、そのストレスに耐えて努力した結果、プロジェクトが無事終了したという経験、およ

び自分の役割を果たせたという達成感は、本人の自信となり、人間的な成長を促すものと考えられる。

ただし、「不安な状態は変わらなかった」「不安が強くなった」との回答がそれぞれ9%あった(図3)。自然には解消しない不安を抱えていたり、活動先で何らかの問題が生じた学生もいた可能性がある。従って、地域貢献活動を単なる労働奉仕に終わらせるのではなく、PBL型課外学習の目的である学生の人間的成長という成果を得るためには、活動開始の段階はもとより、全期間にわたって学生の状態をよく観察し、不安を感じている学生を把握して、適切に、またきめ細かく対応することが重要である。そのためには、教員だけでなく、地域貢献活動の実務的マネジメント、学生対応などに継続して当たる常駐職員の役割が非常に大きい。近年、多くの大学で地域に関する窓口として地域連携センターが作られ、プロジェクトの経過を熟知し、学外、学内のいずれに対しても継続的に窓口となる専門職員が置かれているのも、そういったスタッフの重要性が認められているからであろう。本学でも地域貢献活動をPBL型課外学習の一つとして位置付け、今後も継続、推進していくためには、同様の拠点を学内に設置することが必要と考えられる。

活動前の調査において、活動に当たっての現在の気持ちに最も近いものを尋ねたところ、最も多かったのが「頑張りたい」で50%、続いて「楽しみだ」が30%と、この2項目で80%を占め、「役に立ちたい」「自分が成長できる」を含めると84%が肯定的、積極的な気持ちで活動に向かっていたことが明らかになった。なお、先に述べたように、活動前に不安を感じていた学生が約半数いたにも関わらず、活動前の気持ちに最も近いものとして「不安」を選択したのは4%に過ぎなかった。不安もあるが前向きな気持ちの方が強い学生が多いことが見て取れる。

学生が地域貢献活動に対する気持ちや出来事を周囲の他者とどの程度共有しているかを複数回答で尋ねた結果を、表3に示す。

活動前後で共有の相手の順位は変わらず、最も多い共有の相手は「家族」、次に多いのが「一緒に参加する友人」であった。「誰にも話していない」者は少なく、ほとんどの学生が周囲の誰かに地域貢献活動に関する話を話していることがわかった。自分の経験を普段から周囲の他者と共有し、困ったときには相談するといったことは、社会人として基本的な行動であるが、今回の活動に参加しア

表3 地域貢献活動に対する気持ちや出来事の共有の状態

共有の相手	選択率 (%)	
	活動前	活動中～後
家族	51	58
一緒に参加する友人	49	47
参加しない友人	15	20
その他の人	0	2
誰にも話していない	5	12



ンケートに回答した学生の多くはそのような行動が取れていると考えられる。また、共有の相手として「一緒に参加する友人」を挙げた学生が約半数に上ったが、経験を共有する仲間同士で気持ちや出来事を話し合っていることから、自然な形でピア・サポートができており、不安の解消に役立っているのではないかと推察される。

**(3) 社会的活動への意欲**

活動後の調査で、本学の地域貢献活動に対する今後の意欲を尋ねた結果を図4に示す。

「積極的に参加したい」が27%、「参加してもよい」が55%で、80%以上の学生が意欲的な態度を示していた。しかし「参加したくない」も16%あったことから、今後はその理由を検討し、一度参加した学生全員がまた参加したいと思えるようなものにしていきたい。

また、「積極的に参加したい」および「参加してもよい」と回答した学生に、再度参加したい活動は今回と同じものか違うものかを尋ねた結果が図5である。「同じもの」を選んだ学生が45%おり、「どちらでも良い」を加えると61%が、自分が今回参加した活動に満足したと考えられる。なお、質問紙上は「同じもの」と「違うもの」の2選択肢とし、両方を選択した者を「どちらでも良い」として分類したが、どちらも選択していない者が27%に上ったため、この設問については選択肢を改善したい。

さらに、本学での地域貢献活動を体験した学生は社会貢献活動全般に対する意識がどのような状態にあるのかを知るため、最も身近で取り組みやすいと考えられる、居住地域における社会貢献活動に対する意欲を尋ねたところ、図6のようになった。「積極的に探して参加したい」学生は5%と少ないが、「興味のあるものがあれば参加

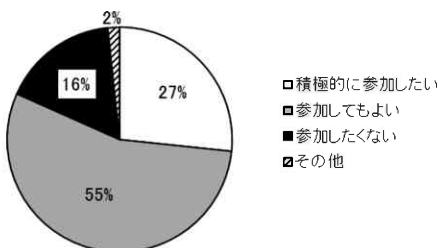


図4 大手前短期大学の地域貢献活動に対する今後の意欲

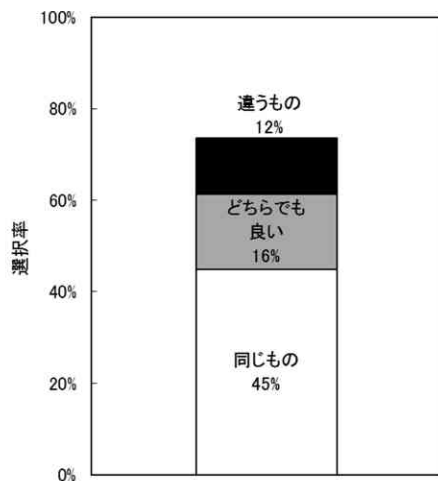


図5 再度参加する場合の活動の種類



学生の社会的意識に対する地域貢献活動の影響

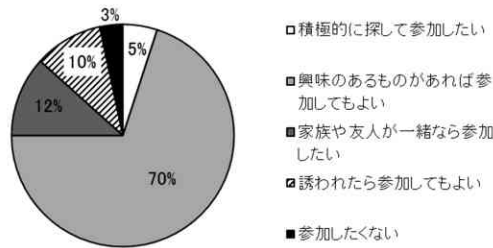


図6 居住地域での社会貢献活動に対する意欲

してもよい」「家族や友人が一緒なら参加したい」といった、消極的ではあるが一定の主體的な参加意識が見られる学生が82%に上った。「誘われたら参加してもよい」という受動的な参加意識の学生が10%、「参加したくない」学生は3%であった。図2に示したように、過去に社会貢献活動の経験がなかった学生が20%いたことを考えると、本学での地域貢献活動を契機に社会活動に対する意識が高まる傾向があるのではないだろうか。

### 3-3 職業に対する意識とその変化

#### (1) 初対面や異世代の人とのコミュニケーション

最近の一般的傾向として、地域のコミュニティとの関係が希薄になり、家族以外の大人とのコミュニケーションに慣れていない学生が増加している。本研究の目的の一つは、地域貢献活動を通して地域の社会人との接触機会を増やすことにより、初対面の人や世代の異なる人とのコミュニケーション能力を伸ばすことが可能かどうかを調べることである。

まず、活動前後の調査において、初対面の大人への対応を尋ねたところ、表4のような結果となった。

表の上から下に向かって、消極的な対応から積極的な対応へ5段階に分けた。どの対応をする学生がどれぐらいいるかの分布を見ると、活動前後に関わらず、3段階目

表4 初対面の大人への対応の分布

対応の内容	選択率 (%)	
	活動前	活動後
なるべく目を合わさない	0	8
目が合ったら挨拶や目礼をするが会話はしない	11	10
話しかけられたら答えるが、それ以上は話さない	42	38
話しかけられたら、それをきっかけに会話する	41	35
様子を見て自分から話しかける	7	8

の「話しかけられたら答えるが、それ以上は話さない」が最も多かった。また、4段階目の「話しかけられたら、それをきっかけに会話する」が次に多く、この2項目で70~80%を占めた。このことから、初対面の大人ともある程度話はするが、そこには「話しかけられたら」という条件があって、自分から積極的に話しかけることはまだ難しいという学生の現状が見て取れる。また今回の調査では、活動前と後で大きな傾向の変化は観察されず、初対面の大人への接し方に変化をもたらすには、数か月程度の地域貢献活動では不足なのではないかと考えられる。

なお、「なるべく目を合わさない」を選択した者が、活動前はいなかったのに対し、活動後は8%になっているが、この理由は特定できていない。ただ、活動後の調査の時期には、活動に関わる教職員にも慣れ、一緒に参加した仲間と共にいる場でリラックスして回答したのに対し、活動前の調査では、学生も初対面の人が大勢いる中で緊張しており、活動を前にしてマイナスイメージな回答を無意識に避ける傾向があった可能性もあると考えている。

## (2) 職業を知ることと就職への意識

就職や職業に対する学生の意識を調べるため、まず、活動前の調査の時点で具体的に知っている職業の有無を尋ねたところ、「無い」が57%、「有る」が41%であった。具体的に知っている職業として挙げたのは、飲食店やファストフード店、コンビニ、スーパーなどの接客業が多く、ホームヘルパーや保育士なども少数存在した。具体的に知っている職業が「有る」と回答した学生がその職業を知った経緯は、「アルバイトなどの自己体験」が70%、「その仕事をしている人に直接聞いた」と「自分で調べた」がそれぞれ20%であった。さらに、その職業への就職を「希望する」者は17%、「希望しない」者が40%、「まだわからない」が37%であった。

ここで、自分が具体的に知っている職業への就職を希望する者のうち、その職業を自己体験で知った者は20%に過ぎず、80%はその職業を自分で調べて知ったと回答しており、具体的には、ホームヘルパー、医療事務、パティシエ、声優などであった。一方、その職業への就職を希望しない者の92%は自己体験でその職業を知ったと回答していた。

逆に、職業を知った経緯別に就職希望の割合を見ると、自己体験で知った者のうち、就職を希望する者は4%、希望しない者が50%だったのに対し、自分で調べて知った者では、就職を希望する者が67%、希望しない者はいなかった。

自己体験のほとんどがアルバイトであることから、学生アルバイトに任されるような仕事に卒業後も就きたいと考える学生は少ないということが明らかになった。一方、「自分で調べた」と回答した学生の中には、自己体験のある者はおらず、ある職業に就きたいという希望や興味が先にあって、その職業のことを自分で調べたものと

推測される。このような学生には、インターンシップや実際にその職に就いている人に話を聞く機会等を通じて、学生自身が思い描いているイメージを実際の仕事にできるだけ近づけておくことが、その後の就職活動や入社後の離職抑止に役立つのではないかと考えられる。そのためにも、学生が様々な仕事をしている社会人と知り合い、実際の仕事の話を知る機会を得られる地域貢献活動の意義は大きい。

一方、活動後の調査において、活動を通じて知った職業の有無を尋ねたところ、「無い」が72%、「有る」が28%であった。具体的に挙げた職業は保育士がほとんどで、他にJR職員、介護、消防の仕事があった。その職業への就職を「希望する」者は6%、「希望しない」者は47%、「まだわからない」者が41%であった。「希望しない」が多いのは、活動を通じて知ったとして挙げた職業の多くが保育士で、本学の学生の就職志向とは異なっていたためではないかと考えられる。また、短い活動期間の中ではその仕事の大変さが強調されて見え、やりがいや面白さまでは感じ取れていない学生が多いのかもしれない。

### (3) 社会人との関係の広がり

次に、社会人の知人の数について調べた結果が表5である。

活動前の時点では、祖父母やいとこなどの親戚や、独立した兄弟姉妹も含めて社会人の知人としたため、「いない」と回答したのは11%であった。これに対し、活動を通じて知り合った社会人は「いない」が68%となった。活動の中で必ず人と挨拶したり話したりする機会があるので、質問紙の「知り合い」という言葉をどの程度の親しさと捉えたかに個人差があったのではないかと考えられる。この点については、今後質問方法を改善したい。

さらに、学生とその社会人の知人との関係性を知るため、社会人の知人がいると回答した学生に対し、その人と話す内容（複数回答）と敬語の使用（単一回答）について尋ねた。知人が複数いる場合は、最もよく話す人について答えてもらった。結果を図7に示す。

「活動前の知人」は、親戚や近所の人など親しい人、知り合ってから長い年月が経っている人も含まれるため、敬語を使う率が低く、話す内容も多岐にわたり、仕事、人

表5 社会人の知人の数による分布

活動前の知人	選択率 (%)	活動で知り合った人	選択率 (%)
10人以上	5	10人以上	2
5～9人	28	5～9人	10
1～4人	55	1～4人	20
いない	11	いない	68

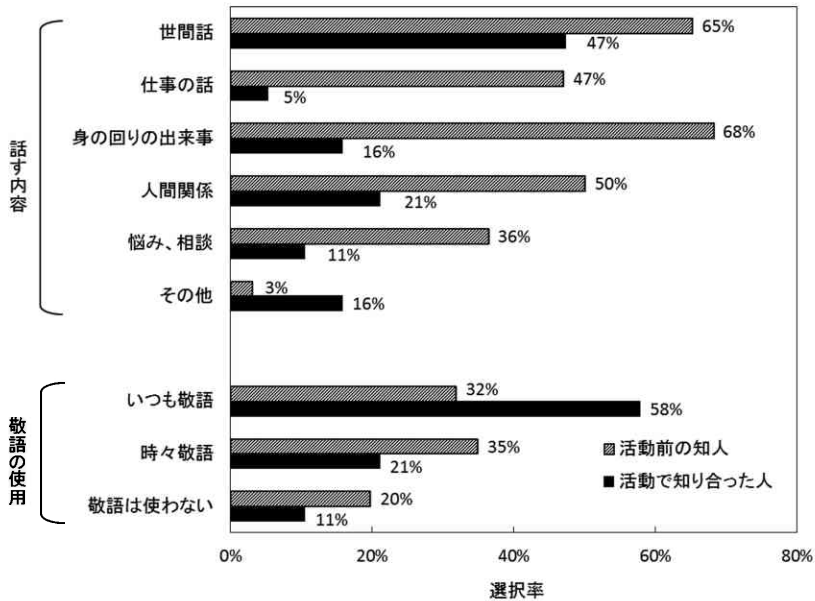


図7 社会人の知人との関係性

人間関係、悩みや相談など個人的な話をする率が高かった。これに対し、「活動で知り合った人」に対しては、敬語を使う率が高く、話す内容も当たり障りのない世間話が突出して多く、全体的に個人的要素の強い話をする率は低かった。これは、知り合ってから時間があまり経っていないことと、知り合ったのが地域貢献活動という公的な場であることが関係していると思われる。なお、活動で知り合った人と話す内容として「その他」の選択率が16%と高かったが、このうち11%は地域貢献活動に関することとの内容記述があったことを補足する。

さらに、活動で知り合った人とその後も話す機会があるかどうかを尋ねたところ、「よくある」が11%、「時々ある」、「あまりない」、「全くない」がそれぞれ26%であった。活動終了後も話す機会が継続しているケースでは、学生にとって新しい人間関係の広がりが期待される。今後、このようなケースを増やすためにも、活動終了後も話す機会を継続させている要因を探りたい。

(4) 職業および自分の将来に対する意識の高まり

学生が職業について知る上で、家族や上述の社会人の知人は、貴重な「生き字引」である。こういった身近な社会人から実際の仕事の話をもどの程度聞いているのかを、活動前の調査において調べた結果が図8である。

家族や知人から仕事の話を知っている学生は「よくある」「時々ある」を合わせて58%に上った。一方、仕事の話を知った経験が「全くない」学生が7%存在した。また、自分の将来について家族と話す機会がどの程度あるかを尋ねると、図9に示すよ

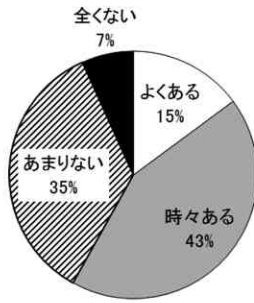


図8 家族や知人から仕事の話聞いた経験

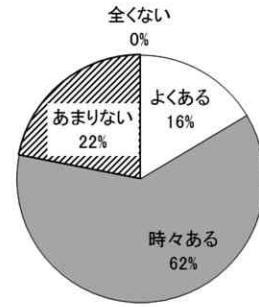


図9 自分の将来について家族と話す機会

うに、「よくある」「時々ある」を合わせて78%となった。将来について家族と話す機会が「全くない」学生はいなかった。このことから、学生自身の将来の希望やそれについての家族の意見などは家庭内で話されているが、身近な大人から職業観や実際の仕事上の出来事、思い等を聞く機会は比較的少ないのではないかと推察される。親を始めとして大人の側も、身近にいる若者、学生、子供たちに対して、機会を見つけては自分の仕事や社会に関する話をする心がけが必要ではないだろうか。

また、活動後の調査において、職業や自分の将来について考えたり、家族や知人と話すことが増えたかどうかを尋ねた結果を表6に示す。

活動前と比べて「変わらない」学生が最も多く48%を占めたが、先に述べたように、元々自分の将来について家族と話す機会を持っている学生が多いため、大きな変化がない学生も多かったのではないかと考えられる。職業や自分の将来について考える機会が「減った」学生はなく、「少し増えた」と「とても増えた」を合わせると50%に上った。

地域貢献活動に参加することで、職業や自分の将来に対する意識が高まることが明らかとなった。

#### 4. まとめ

地域貢献活動に参加した学生の多くは、初めて体験すること、自信のないことへの不安を感じつつも活動に向かい、その中で社会人とコミュニケーションをし、成果を上げるという経験をしていることがわかった。自由に記述させた地域貢献活動につい

表6 職業や将来に対する意識の変化

考える機会の増減	選択率 (%)
とても増えた	8
少し増えた	42
変わらない	48
少し減った	0
とても減った	0

での感想や意見の中にも、「良い経験になった」「たくさんの人と出会えた」という記述が数多く見られた。さらに、自分の能力や短期大学での学習成果が社会で役立つことを実感し、達成感や自信を得た学生も多かった。

これらのことから、地域貢献活動を通して、多くの学生は社会における自分の適性を認識し、自己のキャリア形成への意欲を向上させていることが明らかになった。ただし、本稿における調査対象者は自発的に参加の意思を表明した学生に限られており、小・中・高等学校で授業の一環として行うボランティア活動のように全学生に地域貢献活動を義務付けたとしても、全ての学生に様に社会的意識の向上をもたらすとは言えない。今後は、いかにして「自発的に」参加したいと思う学生を増やすか、また、地域貢献活動に参加している学生をきめ細かく把握し指導する態勢をいかに整備するか、の2点が大きな課題となろう。

また、内閣府の調査によると、学生が仕事を選ぶ理由は、「安定していて長く続けられる」が最も多いが、一方で「自分の好きなことができる」「多くの人の役に立つ」の割合が就業している若者より高く、特に若い世代の学生ほど職業に対して自己実現を求める傾向が強いことがわかっている。このことは、仕事あるいは就職がより身近になり、現実を知っていく過程で、若者の意識も職業に対してより現実的な希望を抱くように変化していくことを示している。職業に自己実現を求めることも大切であるが、それが強すぎると就職の段階でつまづいたり、入社しても早期に離職するといった問題にもつながる。実際に、上述の内閣府調査においても、「自分の好きなことができる」を重視する率は、正規雇用の若者では39.7%なのに対し、非正規雇用の若者で43.1%、無職（専業主婦（夫）、家事手伝いを除く）の若者では50.0%となっており、就業状態との関連が示唆されている。本学で実践している地域貢献活動も、仕事を体験する、あるいは職業を持つ人の話を聞くという形で、学生の職業に対する意識を実社会の現実に近づけ、社会人への移行を円滑にする役割も果たせると考えている。今後も継続して多くの学生に参加を呼びかけたい。

## 謝辞

調査にご協力いただいた皆様、地域貢献活動の立案から実施にあたり実務的な面で多大なるご助力をいただいた本学職員の皆様、学生の受け入れにご協力いただいた伊丹市立障害者福祉センター、伊丹市立こぼと保育所、JR 西日本尼崎駅の職員の皆様および猪名川・藻川の清流復元フォーラム—水辺まつり実行委員会とキューピー株式会社伊丹工場の皆様に感謝し、ここに厚くお礼申し上げます。

なお、本研究は大手前短期大学特定教育・特定研究課題「地域連携を目指したPBL型課外学習の推進に関する研究」の一部であり、平成23～25年度大手前学園特

別教育研究費による助成を受けたものです。

#### 参考文献

- 1) 梶田叡一：意識としての自己：自己意識研究序説，金子書房（1998）
- 2) 諏訪哲二：ただの教師に何ができるか，洋泉社（1998）
- 3) 高石恭子：現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援，京都大学高等教育研究，15，79-88（2009）
- 4) 川上華代：現代学生の特徴と学生相談についての一考察，和光大学現代人間学部紀要，6，141-153（2013）
- 5) 荒川裕美子，保住芳美，吉田浩子：小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連，川崎医療福祉学会誌，16，133-139（2006）
- 6) 伊藤忠弘：ボランティア活動の動機の検討，学習院大学文学部研究年報，58，35-55（2011）
- 7) 内閣府：若者の考え方についての調査（2012）  
[http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h23/pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h23/pdf_index.html)



社会的活動と職業意識に関する実態調査①

このアンケート調査は、学生の皆さんの社会的活動や職業意識の現状を知り、本学として学生の社会貢献活動にどのように関わっていくべきかを考えるための研究を目的としています。結果はすべて統計的に処理し、研究の目的以外に使用することはありませんので、ご協力をお願いします。

大手前短期大学 F D委員会

当てはまるものに○をつけて下さい。( )内は記入して下さい。

F1 最初に、あなた自身についてお聞きします。

年齢 ( ) 歳 性別 ( 男 ・ 女 ) 住まい ( ひとり暮らし ・ 家族と同居 )

F2 あなたが参加した地域貢献活動はどれですか。(参加のものすべてに○)

1. 障害者施設のリポート 2. 保育所のサポート 3. JR駅の展示制作 4. 水辺まつり

Q1 あなたはこれまでに地域に関わる活動をしたことがありますか。家族の手伝いや学校、クラブ活動などで参加したのを含みます。(○はいくつでも)

1. 地域の清掃や美化・緑化 (ゴミ拾い、花壇作りなど) 2. 文化・芸術・伝統文化  
3. 地域のイベント (お祭り、パズルなど) の運営・協力 4. スポーツ (自治会の運動会など)  
5. 地域の防犯・防災・交通安全 6. 高齢者や障害者に対する福祉活動  
7. その他 ( ) 8. 地域に関わる活動はしたことがない

Q2 あなたは現在、余暇 (授業以外) の時間をどのように使っていますか。(主なものを3つまで○)

1. 勉強 (資格取得など含む) 2. クラブ/サークル活動 3. アルバイト 4. 趣味  
5. テレビ/新聞/雑誌を見る 6. インターネット/携帯 7. スポーツ 8. 習い事  
9. 友人とのつきあい 10. 家族との団らん 11. ボランティア活動  
12. その他 ( )

Q3 あなたは、世代の違う初対面の人 (親世代以上の年齢の人など) と同じ場所にしばらく一緒にいることになった時、どうしますか。例えばバス停で同じバスを待っている時などを想定します。(○は1つだけ)

1. なるべく目を合わさないように (話しかけられないように) する  
2. 目が合ったら挨拶や目礼 (会釈) をするが、話是不しい  
3. 話しかけられたら答えるが、それ以上は話さない  
4. 話しかけられたら、それをきっかけに会話を  
5. 様子を見て自分から話しかける

Q4 様々な「仕事 (職業)」の中で、現在あなたが内容を具体的に知っているものはありますか。

1. ある (その仕事は? ) 2. ない → Q5へ

Q4で「1. ある」と答えた人にお聞きします。

■その仕事内容をどうやって知りましたか。(○はいくつでも)

1. アルバイトなどで自分で体験した 2. その仕事をしている人に直接聞いた  
3. 本やインターネットで調べた 4. その他 ( )

■あなたは将来その仕事に就きたいと思いませんか。

1. 思う 2. 思わない 3. まだわからない

Q5 あなたは、自分の将来 (進路、就職など) について家族と話すことがありますか。

1. よくある 2. 時々ある 3. あまりない 4. 全くない

Q6 あなたには現在、家族や先生以外によく話をする社会人の知人はいますか。祖父母、独立した兄弟姉妹、親戚、近所の人、アルバイト先の人などを含みます。

1. 大勢いる (10人以上) 2. いる (5~9人) 3. 少しいる (1~4人) 4. いない → Q7へ

Q6で「1. 大勢いる」「2. いる」「3. 少しいる」と答えた人にお聞きします。

社会人の知人が複数いる場合は、最もよく話す人について答えて下さい。

■その知人とはいくつ話しますか。(○はいくつでも)

1. 世間話 2. 仕事の話 3. 身の回りの出来事 4. 家族や友人、人間関係の話  
5. 自分の感情や悩み、相談事 6. その他 ( )

■その知人は敬語で話しますか。

1. いつも敬語で話す 2. 敬語を使ったり使わなかったりする 3. 敬語は使わない

Q7 家族や知人から、その人の仕事 (なぜその仕事に就いたか、面白さ、苦労話など) について話を聞いたことはありますか。

1. よくある 2. 時々ある 3. あまりない 4. 全くない

Q8 今回、地域貢献活動に参加しようと思ったのはなぜですか。(主なものを3つまで○)

1. 人の役に立ちたいから 2. 好き (得意) なことだから  
3. 新しいことに挑戦したいから 4. 新しい仲間や知り合いができるから  
5. 就職活動に有利になりそうだから 6. 単位がもらえるから  
7. 時間があるから 8. 楽しそうだから  
9. 友達や先生に誘われたから 10. その他 ( )

Q9 今回の地域貢献活動に参加するにあたって、不安はありますか。

1. ほとんどない 2. あまりない 3. 少しある 4. かなりある

Q9で「3. 少しある」「4. かなりある」と答えた人にお聞きします。

■どんなことが不安ですか。(○はいくつでも)

1. 自分にできるのか 2. 活動先の人とうまくやれているか  
3. 友達と一緒にできないと不安 4. その他 ( )

Q10 今回の地域貢献活動について、家族や友人に話をしましたか。

1. 家族に話した 2. 一緒に参加する友人に話した 3. 参加しない友人に話した  
4. その他の人 ( ) に話した 5. 誰にも話していない

Q11 地域貢献活動参加にあたって、あなたの今の気持ちに最も近いのはどれですか。(○は1つだけ)

1. 楽しみだ 2. 頑張りたい 3. 役に立ちたい 4. 不安 5. 自信がない 6. 大変そう  
7. 自分が成長できる 8. その他 ( )

Q12 地域貢献活動に対する意見・要望などがあれば自由に記入して下さい。

( )

ご協力ありがとうございました。

## 社会的活動と職業意識に関する実態調査②

このアンケート調査は、学生の皆さんの社会的活動や職業意識の現状を知り、本学として学生の社会貢献活動にどのように関わっていくべきかを考えるための研究を目的としています。結果はすべて統計的に処理し、研究の目的以外に使用することはありませんので、ご協力をお願いします。

大手前短期大学 F D委員会

当てはまるものに○をつけて下さい。( )内は記入して下さい。

F1 最初に、あなた自身についてお聞きします。

年齢 ( ) 歳 性別 ( 男 ・ 女 ) 住まい ( ひとり暮らし ・ 家族と同居 )

F2 あなたは当初の予定通り活動に参加できましたか。参加したもについて答えて下さい。

参加状況 活動	全回 出席	8割 以上	5~7割 程度	半分 以下	途中で やめた	欠席(やめた)理由
1. 障害者施設						1. 体調不良 2. 急用 3. 内容が予想と違った 4. その他 ( )
2. 保育所						1. 体調不良 2. 急用 3. 内容が予想と違った 4. その他 ( )
3. JR 駅展示						1. 体調不良 2. 急用 3. 内容が予想と違った 4. その他 ( )
4. 水辺まつり						1. 体調不良 2. 急用 3. 内容が予想と違った 4. その他 ( )

Q1 今回、地域貢献活動に参加してあなたはどうか感じましたか。(主なものを3つまで○)

- 人の役に立てた
- 好き(得意)なことが活用できた
- 新しいことに挑戦できた
- 新しい仲間や知り合いができた
- 自信がついた
- 社会や仕事(職業)について知る機会になった
- 楽しかった
- 就職活動で話せる(書ける)内容ができた
- 自分が成長した(変わった)
- 負担が大きかった→(精神的・体力的・経済的)
- その他( )

Q2 地域貢献活動に参加する前、心配(不安)なことはありましたか。

- ほとんどなかった
- あまりなかった
- 少しあった
- かなりあった

Q2で「3. 少しあった」「4. かなりあった」と答えた人にお聞きします。

■活動に参加して、心配だったことはどうなりましたか。

- なくなった・減った
- 心配なのは変わらなかった
- 心配(不安)が強くなった

Q3 あなたが暮らしで地域貢献活動があれば、参加したいと思いませんか。(○は1つだけ)

- 積極的に探して参加したい
- 興味のあるものがあれば参加してもよい
- 家族や友人と一緒に参加したい
- 誘われたら参加してもよい
- 参加したくない
- その他( )

Q4 あなたは現在、余暇(授業以外)の時間をどのように使っていますか。(主なものを3つまで○)

- 勉強(資格取得など含む)
- クラブ/サークル活動
- アルバイト
- 趣味
- テレビ/新聞/雑誌を見る
- インターネット/携帯
- スポーツ
- 習い事
- 友人とのつきあい
- 家族との団らん
- ボランティア活動
- その他( )

Q5 あなたは、世代の違う初対面の人(親世代以上の年齢の人など)と同じ場所にしばらく一緒にいることになった時、どうしますか。例えばバス停で同じバスを待っている時などを想定します。(○は1つだけ)

- なるべく目を合わさないように(話しかけられないように)する
- 目が合ったら挨拶や目礼(会釈)をするが、話さない
- 話しかけられたら答えるが、それ以上は話さない
- 話しかけられたら、それをきっかけに会話する
- 様子を見て自分から話しかける

Q6 今回の地域貢献活動を通して、新たに具体的な内容を知った仕事(職業)はありますか。

- ある(その仕事は? )
- ない → Q7へ

Q6で「1. ある」と答えた人にお聞きします。

■あなたは将来その仕事に就きたいと思いませんか。

- 思う
- 思わない
- まだわからない

Q7 今回の地域貢献活動を通して、新たに知り合った社会人はいますか。

- 大勢いる(10人以上)
- いる(5~9人)
- 少しいる(1~4人)
- いない → Q8へ

Q7で「1. 大勢いる」「2. いる」「3. 少しいる」と答えた人にお聞きします。  
今回知り合った社会人が複数いる場合は、最もよく話す人について答えて下さい。

■その人とはどんな話をしますか。(○はいくつでも)

- 世間話
- 仕事の話
- 身の回りの出来事
- 家族や友人、人間関係の話
- 自分の感情や悩み、相談事
- その他( )

■その人とは敬語で話しますか。

- いつも敬語で話す
- 敬語を使ったり使わなかったりする
- 敬語は使わない

■地域貢献活動が終わってからも、その人と話す機会がありますか。

- よくある
- 時々ある
- あまりない
- 全くない

Q8 地域貢献活動に参加する前と比べて、仕事(職業)や自分の将来(進路、就職など)について考えたり、家族や知人と話すことは増えましたか。

- とても増えた
- 少し増えた
- 変わらない
- 少し減った
- とても減った

Q9 地域貢献活動に参加している時、その日の出来事や感じたことを人に話しましたか。(○はいくつでも)

- 家族に話した
- 一緒に参加した友人に話した
- 参加していない友人に話した
- その他の人( )に話した
- 誰にも話していない

Q10 今後また、本学で地域貢献活動の機会があればどうしますか。

- 積極的に参加したい→(同じもの・違うもの)
- 参加してもよい→(同じもの・違うもの)
- 参加したくない
- その他( )

Q11 地域貢献活動に参加しての感想、今後についての意見、要望などがあれば自由に記入して下さい。

[ ]

ご協力ありがとうございました。